

『吾乃松原』について

——三重万葉研究ノート(一)——

廣岡義隆

I はじめに

十二年庚辰冬十月依^ニ大宰少貳藤原朝臣廣嗣謀反發^レ軍、幸^ニ于伊勢國^ニ之時河口行宮、

天皇御製歌一首。

妹^{いも}尔^に恋^{こひ} 吾乃松原 見^み渡^{わた}者^{もの} 潮^{しほ}干^ひ乃^の瀨^な尔^に 多^た頭^づ鳴^な渡^{わた} (卷六、一〇三)

○番歌)

右一首今案、吾松原在三重郡^ニ、相^ニ去河口行宮^ニ遠矣。若疑御^ニ在朝明行宮^ニ之時所^ニ製御歌、傳者誤^レ之歟。

天平十二年、折から九州では藤原広嗣の乱が起り都も騒然とした、その十月二十九日に聖武天皇は都を發ち、伊賀・伊勢・美濃・近江と行幸し、終には山背国相楽郡に落付き恭仁京造宮に着手した。その後、紫香樂・難波と遷都する、その緒となつたのである。その天平十二年十一月某日の伊勢での聖武詠が右の歌である。

この一〇三〇番歌の第二句「吾乃松原」は、一般に「アガノマツバラ」と訓まれてゐるが、小考はこの珍訓に対する疑ひから出發してゐる。即ち、「ア(ワ)ガ」は「吾ガ」の義であつて、その下への修飾格節であるにもかかはらず、体言を受ける格助詞「ノ」がそれを受けてゐると云ふ變則的接続になつてゐるといふ点である。それがたとひ固有

名詞(地名)であるにせよ、借訓であるにせよ、訓の許される範圍を脱してゐると思ふ。

そこで私は以下の如く考察した。IIで「松」と「待」の掛詞が集中例のあることを見、IIIで「待つ」の語が「ノ格」をもとりうることを確認し、IVで類歌を参照しつつ問題歌の一二句の意味を考察し第二句を「ワレ(アレ)ノマツバラ」若しくは「ワ(ア)ノマツバラヨ(ユ)」と訓み、これは通説のやうな地名ではなく「吾の待つ」までが「松原」を引き出す序に他ならないことを明らかにした。現今の注釈書の多くは「吾乃松原」を未詳としながらもその左注「吾松原在三重郡」により三重の地名としてゐるのであるが、ここでは万葉歌を左注から切り放し、左注も万葉卷六編纂時における一説にすぎないとみたのである。次いでVで第二句「吾乃松原」についての諸説を検証し、VIで万葉後における「わか松原」の歌枕化の過程を跡付けた。

II 松^{まつ}と待^{まつ}

万葉における掛詞は、一方では例へば長忌寸意吉麻呂の戲笑歌中に見られるやうな例もあるが、平安朝のものやうに掛詞によつて表裏の情をしみじみと訴へるまでに發達したものは少ない(注1)。しかし

「吾妹子を去来見の山」(1・四四) 式に枕詞や序詞として複相にかか
るものは多いし、「列々椿つらつらに見」(1・五四) と同音によつて
景と情を掛けるものもある。ここでは万葉の掛詞に関しては概観に止
め、右により名詞「松」と動詞「待つ」との掛詞があつてもをかしく
ない点を確認し、以下見てゆきたい。

① 君来ずは形見にせむと我が二人殖松木君乎待出牟 (11・二四八四)
(左の傍線はその部分が原文で
ある事を示す。以下同じ。)

② いざ子ども早く日本へ大伴の御津乃浜松待恋奴良武 (1・六三)

この①②例は四句の「松」と五句の「待」が対応し、松に待つを響
かせた例である。これと同様の例に(13・三二五八)や(15・三七二
一)がある。

③ 白鳥の飛羽山松之待年曾吾が恋ひわたるこの月ごろを (4・五八八)

④ 味鴨の住む渚沙の入江の荒磯松我乎待児等波ただ一人のみ (11・二
七五一)

この③④例は、さきの「去来見の山」式であり、この場合は共に序
詞として「松」が「待」にかかつてゐる。

⑤ 吾妹子を早見浜風倭なる吾松椿吹かざるなゆめ (1・七三)

四句の「松」に「待」を重ねたものである(澤瀉『注釋』参照)。「松
が根の松事遠」(13・三二五八)の例もある。

⑥ 吾が屋戸の君松樹尔零る雪の行きには去かじ待西将待 (6・一〇四
一)

⑦ 妹らがり今木の嶺に茂り立つ嬌待木者古人みけむ (9・一七九五)

⑧ 梅の花咲きて落りなば吾妹子を来むか来じかと吾待乃木曾 (10・一
九二二)

これら⑥⑦⑧の例は「松の木」と「待つ」の語を重ね合はせたもの
で、そこには枕詞も序詞もなく、その意味で純粹な形の掛詞であると

いへよう。松には「一つ松」の語まであるやうに、他の何かをぼつん
と待つやうな情感があり、そこに同音の「待つ」が結びついて、早く
も緊密な掛詞を成立せしめてゐたのであらう。なほ、⑥⑦の歌句に振
つた傍点は、「松・待」以外に「去来見の山」式掛詞が指摘できるもの
である。

III 「待つ」の格

次に、用言「待つ」が受ける格関係を確認して、次章の基としたい。
以下『万葉集総索引』から助詞表記の明らかな例のみを拾つた。

ヲ格の例…君ヲ——(「待つ」の略)・妹ヲ——我ヲ——吾ヲ——

汝ヲ——使ヲ——言ヲ——月ヲ——長キ日ヲ——春雨ヲ

——風ノ吹カムヲ——(以上、用例多く、
歌番号は略した。)

ガ格の例…吾ガ——(十七 3957 3960 4011 4013 4018 416)・妹ガ——(十五 3663 3685)・

吾妹子ガ——(十五 3713)

ノ格の例…宇具比須能・麻知迦弓尔勢斯・宇米我波奈 (五 84)

伊敝妣等能・麻知古布良牟尔・安可思都流宇乎 (十五 3653)

武佐左妣乃・此待鳥如 (七 1367)

本稿ではノ格を採るべきであると思ふので、これは原文で出してお
いた。「待つ」がノ格を受けるといふのは一見当然のことのやうである
が、例へば「恋ふ」の語が万葉では一般にヲ格をとらずニ格をとると
いふ著名な事実(注二)もあり、これの確認は必要である。

『奈良朝文法史』(山田孝雄)では、格助詞「の」は、「体言を受け
てそが連体格に立つを示し、又体言に対して連体格に立てる語を示す」
(注三)と規定し、その転用として、「多く付属句たるものの主語を示す
に用ゐらるるなり。その独立文の主語を示せるは稀に存するを見るの
み」(注四)と言及してゐる。

右のノ格の三例を見ると、第一例の「ウグヒスノ」は「マツ」にか
かることは問題ないが、その下の「ウメガハナ」にもかかる語勢があ
り注意する必要がある。第二三例の「ノ」は「マツ」の主格を示すも
のとみている。

他に「ハ」辞を挿むもの（家人ハ——・吾ハ——）、「モ」辞を挿む
もの（家ナル人モ——・人モ——）がある。

以上で「待つ」の語は、用例少数ながらも、主格としてのノ格を受
けることが確認できた。

IV 妹尔恋 吾乃松原

一〇三〇番歌を考察する上で見落してはならない歌がある。卷十七
の三八九〇番歌である。参照の爲二首ABとして並べてみよう。

A 和我勢児乎 安我松原欲 見度婆 安麻乎等女登母 多麻藻可流美

由（17・三八九〇）

B 妹尔恋 吾乃松原 見渡者 潮干乃瀧尔 多頭鳴渡

（6・一〇三〇）

A 歌は「天平二年庚午冬十一月、大宰帥大伴卿被_レ任_二大納言_一兼_レ帥
上_レ京之時、倭從等別取_二海路_一入_レ京。於_レ是悲_二傷_一羈旅、各陳_二所心_一」
作歌十首」と題詞があるその冒頭の一首である。その左注には「右一
首三野連石守作」とある。卷十七の巻頭歌でもある。三野連石守につ
いては大伴旅人の従者という以外、詳細はわからない。卷八の一六四
四番歌も彼の歌で、万葉第三期末から四期にかけての人物とは云へよ
う。

A 歌の作歌事情は右に挙げた題詞がよく物語つてゐる。大伴旅人の
大納言昇進により九州大宰から上京の折、その従者が一足先に上京し
たもので、主人旅人と別行動であつたことがわかる。旅人は一月遅く

十二月に帰京してゐる（3・四四六題詞、6・九六五題詞）。

卷十七以降は所謂「家持歌日誌歌卷」であることを考へると、A 歌
以降の十首は、三野連石守等一行が都で、主人旅人の帰京を迎へた際
に旅人に献上され、それがその息家持の手にすることになつて「歌日
誌歌卷」の巻頭を飾ることになつたのかもしれない（注五）。

大伴坂上郎女がこの三野連石守と同道したのか否かわからないが、
彼女も同じ十一月に帰京の途についてゐる（6・九六三題詞）ので、
石守等十首は或いは大伴坂上郎女の手を経て家持の手にすることにな
つたといふ可能性もある（注六）。又、父に従つて九州にゐた家持も、同
じ折に坂上郎女と共に上京したことも考へられる（注七）。なほ、この上
京途次の坂上郎女の歌一首（6・九六四）の初二句と、A 歌の初二句
は関連があるとみようとすれば見れないこともない歌である。

その詳細はわからないにしても、A 歌は卷十七巻頭にあることによ
つて、家持との関連は否定できない。このA 歌とB 歌とは誰が見ても
無関係の歌とは云へない。二句三句の対応と下句の叙景の照応である。
A 歌の初句から二句にかけての「我が背子を吾が」までは、その下の
「松原」にかかつてゆく序とみている。これはIIの「松と待」の掛詞
例からみて何ら支障がないばかりか、積極的に支持できるし、諸注も
さうしてゐる。

B 歌の作者は聖武天皇であるが、これはさきに記した天平十二年十
一月の行幸の折のものであり、家持も内舍人としてその行幸に従ひ天
皇の傍近くにあつたことは、卷六の一〇二九番歌以下の歌々で知られる。
その折、家持の手_レてゐたA 歌を見、A 歌に触発されて生れたのが
B 歌であらう。即ち、A 歌とB 歌の間には直接関係があると云へる。
とするならば、B 歌の初句の解は二句にまで互らせて、「妹尔恋吾乃」
がその下の「松原」にかかる序とみるのが順当な解であらう（注八）。「妹

「尔恋」が序であるゆゑに一首の解には無縁の語と云ひきることとはできないが、一首の主意は「松原 見渡者 潮干乃瀧尔 多頭鳴渡」となる。即ち、次章のV諸説通観で見るやうに、B歌の左注「吾松原在三重郡」に惑はされて「吾乃松原」を地名とするものが多いが、それはをかしいといふことになる。これを非地名と解くものに、先の注八で指摘した『代匠記』初稿本の他、『略解』所引の宣長説及び『古義』が早くあるが、本文や訓に違ひがある。詳しくは次章で触れる。B歌は伊勢で詠まれた歌には違ひないが、固有名詞（地名）は詠み込まれてゐないといふことになる。

初句から二句にかけて序詞とみることは、以上によつて誤りはないと思はれるが、特に第二句の訓については問題点が多い。その本文については、誤字説をとるものもあるが、諸本に異同がないので「吾乃松原」として、その訓を考へるべきである。一番妥当かと思はれる訓は、「ワレ（アレ）ノマツバラ」と訓むことである。これはその本文に従つて素直に訓んだものである。但し、「吾」の訓はワレかアレかは確定できない。ワ・アと訓むことも可能であるが、それだと字足らずになる。その意は「恋人に心ひかれて」私が逢へる機会を心待ちにしてゐる、そのマツといふ意のこもる松原を通して」となる。

ところが、『奈良朝文法史』には、

「の」が附属する詞は主として第三称にして多くは「れ」の音の加はらぬものなりとす。（注九）

とあり、抵触することになる。「待つ」の語がノ格をとることはⅢで確認し、ここでも「吾乃松原」と明確に表記されてゐるので「の」については問題はない。ここで右の例外として敢へて「ワレ（アレ）ノマツバラ」を推してもいいが、一案として「ワ（ア）ノマツ」と訓むことも考へたい。「ワ（ア）ノマツバラ」では字足らずで歌調も整はず、

もう一音節欲しいところである。A歌の「安我松原欲」によつて「ワ（ア）ノマツバラヨ」又は「ワ（ア）ノマツバラユ」と訓むより他はあるまい。前案の「ワレ（アレ）ノマツバラ」訓でも意味上は、「くよりく」を通しての意の「從（ゆ・よ）」を補はなければならない。ただ「ワ（ア）ノマツバラヨ（ユ）」訓の難点は、その本文に「從」（欲）「由」が表記されてゐない点である。B歌には助詞が「尔」（二回）「乃」（二回）「者」と全て表記されてゐて、ヨ・ユを第二句に補ふとすると、ここだけが無表記となり問題が残る。

齒切れのいい結論が出せなくて残念であるが、今は考へられる訓とその問題点を出すにとどめておきたい。即ち「ワレ（アレ）ノマツバラ」若しくは「ワ（ア）ノマツバラヨ（ユ）」と訓む。その意味は両訓いづれにしても同じである。（注十）

恋人に心ひかれて私が逢へる機会を心待ちにしてゐる、そのマツといふ意のこもる（折からの眼前の景である）松原越しに見渡すと、潮干の潟で鶴が妻を求めて鳴いて飛び渡つてゐる、それがよく見える、とならう。

妹は序詞中の語であるが「鶴の呼び声」から来る相聞の情を汲んで本意も含むものとする、その妹とは誰であらうか。光明子是一行の中にあつたと推定される（注十一）から、夫人の県犬養広刀自、武智麻呂の娘、房前の娘、佐為王の娘広岡古那智の中の誰かであらうか。

海上女王（4・五三二）、酒人女王（4・六二四）、八代女王（4・六二六）かも知れないし、他の女人かも知れない。不明とする他はない。「恋ふ」の語から、眼前にゐない女人でなければならぬ。

松原はどこともわからないが、一志の河口から鈴鹿の赤坂、朝明、桑名の石占に至る伊勢湾岸の松原に違ひない。今の伊勢若松辺りでの詠であらうか。なほ、A歌の「松原」はその題詞、又三八九一番歌か

ら、九州那大津（博多）辺りの景である（注十二）。

「鶴鳴き渡る」は「潮干の潟」でのものであるから求食としての景であるが、ラブコールとして表現されてゐる鶴鳴が集中何例か指摘できる。

湯の原に鳴く、葦鶴は吾が如く妹に恋ふれや、時わかず鳴く、（6・九六）

一）

潮干れば葦辺にさわく白鶴の妻呼ぶ声は宮もとどろに（6・一〇六）

四）

……夕されば 鶴が妻呼ぶ、難波潟 み津の崎より……（8・一四）

五三）

みなと風寒く吹くらし奈呉の江に妻呼び交し鶴さはに鳴く、（17・四）

〇一八）

等である。次歌もその例とみてよい。

求食すと磯に住む鶴明けされば浜風寒みおの妻呼ぶも（7・一一九）

八）

よつてこの第五句「鶴鳴き渡る」は、その初句「妹に恋ひ」と対応して、作者聖武の相聞の情がこめられてゐるとみていい（注十三）。折は十一月へこの年の十一月十四日は太陽暦の十二月十一日に当る（注十四）身を刺す寒さで人恋しい候、ましてや旅の身空である。その旅愁を眼前の景に詠み込んだものである。

「鶴鳴き渡る」は「鳴いて飛び渡つてゐる」と訳したが、「渡る」を補助動詞とつて「鳴きつづけてゐる」と訳すことも可能である。前者なら聴覚に視覚の加はつたもの、後者なら聴覚の詠となるが、佐佐木信綱はA歌について次のやうに述べてゐる。

この歌は、上に「見渡せば」とあつて「見ゆ」と結び、「見」を重ねてゐるが、卷六の歌は、「見わたせば」を受けて「鳴き渡る」と結ん

で、同音を重複して用ゐてゐることに留意せられる。（注十五）

これはB歌の「見渡せば……鳴き渡る」の「渡る」に注目しての言であるが、次のやうに

A 見渡せば海人少女ども玉藻刈る——見ゆ

B 見渡せば潮干の潟に鶴鳴き渡る——（見ゆ）

として比べてみると、歌意としてB歌末に「見ゆ」を補つた方がいいであらう。とすると「渡る」を補助動詞としてみた場合でも第五句に視覚の意を含めた方がいいことになる。

以上で一〇三〇番歌の解は終つた。「万葉歌枕」の「吾の松原」を否定したものでネガティブな結果となつたが、これも致し方ない。可能性のあるものを己が住む地に牽きつけて解釈するのは研究者のすることではない。「万葉歌枕」は否定したが、伊勢の地での詠歌に違ひないことは指摘した通りである。

なほ、関連する歌に次のものがある。

C 風吹者 黄葉散乍 少雲 吾松原 清在莫国（10・二一九八）

この第四句も「アガノマツバラ」の訓が一般であるが他説もある。元暦校本（平安末写）の訓は「わかまつはらの」で他の古訓は「ワカマツハラハ」である。『略解』所引の宣長説や井上『新考』は誤字説をとつて「キミマツバラハ」と訓んでゐる。武田『全註釈』・『総釈』（安藤正次担当）や澤瀉『注釈』は「ワガノマツバラ」とし、『私注』は「ワガマツバラノ」としてゐる。今は「ア（ワ）ガノマツバラ」は本稿冒頭に記した理由により、又「キミマツバラ」は誤字説によつてゐるの、をかしいといふ指摘にとどめておかう。訓は擱くとして、この「吾松原」も「吾」が「松原」を引き出す短い序で、歌意は「松原は少からず清らかなことだ」となつて、地名が詠まれてゐる歌ではないことになる。AB歌との先後は、卷十の成立・卷十所収歌の詠作年代とも

関連し微妙なところだが、詠法の一般からすると、A歌、B歌、若しくはそれらの類歌（万葉集中にないが当時存したことも考へられるので）の省略形がC歌であらう。

このC歌もB歌によつて伊勢の歌とするものがある（注十六）が、同じく伊勢の地を否定しなければならず、従つてこの場合は三重関係歌ではなくなつてくる。

V 諸説通観

卷六、一〇三〇番歌の第二句「吾乃松原」に関する諸説をみてゆきたい。注釈書で前説に拠つてゐるものは多く省略することにする。逆に特殊なものは、資料として、煩をいとはず引くことにする。説別・年代順に列挙してゆく。

(1)「吾松原在三重郡」(一〇三〇番歌左注)・あかまつばら

問題歌の左注に、「右一首今案、吾松原在三重郡、相去河口行宮遠矣。若疑御在朝明行宮之時所製御歌、傳者誤之歟。」とある。この「傳者誤之」と云ふのは第二句に関する伝ではなく、一〇二九番歌題詞の河口行宮での作とする伝を云ふのであるが、河口行宮云々は一〇二九番の家持作歌のみにかかる題詞で、一〇三〇番歌の題詞は「十二年庚辰……幸于伊勢国之時、天皇御製歌」とみることもできる（注十七）。家持歌を先にし、天皇歌を次にしてゐるところからみても、むしろさうみるのが妥当だらう。左注はこの「伝」に疑義を挿み、「今案ずるに」と卷六編集者の意見を述べたものであつて、これを金科玉条にすべきではない。即ちこれを万葉卷六編集時の一説（単なる編者の意見）とみたい。この説は古い故に尊重すべきではあるが、必ずしも一〇三〇番歌の解を縛るものではない。し

かしながら、卷六編者が「吾松原在三重郡」としたからには、何らかの根拠があつた筈である。それは諸注の引く『大安寺伽藍縁起流記資財帳』に載る三重郡の赤松原に拠つたものであらう。天平十九年二月十一日の文書である。この資財帳に直接拠つたか否かは不明であるが、天平十九年に三重郡に「あかまつばら」（赤松の松原を抱く字か）が存したことは確かで、資財帳を目にしなくても当時存した大安寺領「あかまつばら」を知ることができよう。これにより左注の「吾松原」も「あかまつばら」と訓む。これを第二句の「吾乃松原」と同所であらうと編者は誤認したのである。

○三重郡赤松原百町開八町未開田 代九十二町 四至。東上無清泉。南甲社山道。北郡界道。西山之隈。（『大安寺伽藍縁起流記資財帳』群書類従本による。天平十九年747）

△赤松原、按、薦野村の上方にあり、金谷、赤松原、赤茶園と云。

又字寺坂と云古蹟あり。（『三国地誌』三重郡、大日本地誌大系本（雄山閣）による。宝曆十三年1763）

△加富神社（中略）（大安）三重郡赤松原百町云々四至東上無清泉南甲社山道北郡堺道西山之隈トアリ。甲ノ社、加富社ナルベシ。

（『神名帳考證』三重郡、伴信友全集第一巻による。文化十年1813）

(2)若松村（河曲郡）・わかまつばら

現在の北若松を主とする「伊勢若松」（鈴鹿市北若松町、中若松町、南若松町）である。近鉄名古屋線「伊勢若松」駅が存する。後の歌枕「若の松原」はここをさすと思はれるが、それも『勢陽雜記』以降かと思はれる。江戸初期以来、聖武作の「吾乃松原」をここに比定するものは多い。或いは聖武作もこの辺の松原を見遣つての詠かも知れないが、「吾乃松原」が地名でないことは既に述べたところである。『晤語』が「此御製の伝へよりして地名とはなせしなるべし。」としてゐるのは注意していい。なほ、信友の『神名帳考證』に云ふ

深田神社は今も北若松町北若松（近鉄伊勢若松駅より徒歩十五分）に存し、聖武行宮趾を伝へると云ふ弘善寺（同、徒歩七分）もその近くに存する。

○若松原 神戸より一里異にあり。海辺松原のうちに里有、是なん名所の事ならんか。（中略）名所和歌集に三重郡とあり。河曲とならびたる郡なれば、そのかみのわかち、さも有ぬべし。（『勢陽雜記』河曲郡、鶴舞図書館蔵本による。万治二年頃1659）

○若松原 川曲郡 神戸より一里異方に若松村と云有、海辺にして松原のうちに里あり。（『伊勢名所拾遺集』延宝七年序1679）

○わか松原 若松原伊勢也（北村季吟『万葉拾穂抄』貞享三年1686）右の二文獻を踏まへてゐると思はれる。

○今考るに、吾松原は本郡にして、三重郡に非ず、神戸の異海浜一里、若松村是なり。（『三国地誌』河曲郡、大日本地誌大系本（雄山閣）による。宝曆十三年1763）

○若松 神戸より一里異也。海浜繁昌の湊也。（万葉聖武歌、新古今院歌あり）（『伊勢参宮名所図会』寛政九年1797）

○深田神社 北若松村（和鈔）深田^{布加}多^多。○今在若松村一社、若松原此地也。○吾子ノ松原聖武行宮ノ跡アリ。（『神名帳考證』河曲郡、伴信友全集第一巻による。文化十年1813）

○神名帳考證云、河曲郡深田神社、今在若松村一社。若松原此地也と見えて、海部郷に若松原といへる有。その近きに田鶴浜とて、この名産に海苔長さ五尺余も連綿たる有とかや。されば此あたりを行幸の時、みほしましてみよみませし御製にやあらん。此御製の伝へよりして地名とはなせしなるべし。（『晤語』日本隨筆大成二期第十二巻による。文政三年1820）

○若乃松原 南若松ノ海岸ヲ云、（中略）旧名吾乃松原、天平十二年

十二月聖武帝藤原広嗣カ乱を避て潜幸ノ時コ、ニ行宮アリ、（中略）万葉第六 妹尔恋吾乃松原見渡為者塩干渴尔田鶴鳴渡流 此製作ニヨリ田鶴ノ浜ノ名ニ冒タルナルヘシ（『勢陽五鈴遺響』河曲郡、県郷土資料叢書本による。天保四年1833）

○若乃松原^{又田鶴浜ト称ス} 行宮址 南若松村ノ海岸ヲ云フ。眺望絶佳ナリ。古老伝ヘ云フ聖武天皇本州ヘ行幸ノ年行宮ヲ此ニ設クト。今、宮址、松原共ニ其址ヲ止メズ。又云フ本村海岸ハ常ニ南洋激浪ノ嚼滅ズル所トナリ、積年ノ久シキ三四町ノ土地ヲ失フニ至リシト。由テ考フルニ、古、松原ト称スルモノ蓋シ共ニ海中に没シ、今、現地ニ仮托セルモノナラン。（『伊勢名勝志』明治二十二年1889）

○若松 其海浜を若松原と称す。（『大日本地名辞書』明治三十三年1900）

○北若松ナル弘善寺トイフハ昔聖武天皇、藤原広嗣ガ乱ヲ避ケ給ヒ潜幸アラセラレ此所ニ行宮ヲ設ケ給ヒシ靈地趾ニシテ、（中略）万葉歌以下次章の①④⑤⑥⑦⑧歌を挙げる）：然シ之ヲ以テ眞ノ靈地ナリヤ否ヤハ計リ難シ。口碑ニヨレバ、元ノ行宮跡ハ海岸近クアリシモノナリト云フ。然ルニ我若松海浜ハ世ヲ経ルニ從ヒ海波怒濤ニ洗ハレテ欠損スルヲ以テ、元ノ旧跡ハ現今ノ海岸ヨリ四町余ノ沖ニアリ。当寺ハ其旧跡ヲ移セシモノトナリトゾ。其弘善寺鐘銘ニ曰ク「夫當者昔年聖武帝為幸居靈蹟而今乃專修念佛眞宗梵刹也」（『三重大学図書館蔵『三重県郷土誌』「河芸郡若松村郷土地史取調」分担生、師範学校本科老年伊藤久三郎、明治四十年1907）

○昔シ、天正之比、及火災、堂塔不殘焼失シ、宝物等往古聖武帝幸居之旧記宸翰等、皆悉焼失セリ、（中略）當時ハ則无量寺ナリ（弘善寺鐘銘（鐘裏、鑿刻文）昭和三十三年改鑄のもの。1958）

○弘善寺は、もと真言宗無量寺で、現地より十六町海側にあつたが、

津波で沈み、現地に再建された。資料等はその後焼失し、残るのは鐘銘のみであるが、その鐘も大戦時供出し、今のものは新鑄である。(弘善寺住職、誓山信曉氏の言。昭和五十四年九月1979)

(3) わかの松原(非地名、序詞説)

この解は正しい。『代匠記』から学ぶところは多い。但しその訓は当時の風潮によつてゐる。

○いもにこひわがの松原 いもに恋する我といひかけたり。第十七にわがせこをあが松原ゆ見わたせばとよめる哥有。これは名所にはあらで、只わがせこを待といふ心につづけたり。筑紫よりのぼる時の哥なれば名所にあらずとは知なり。此哥に准ぜば、わがの松原と中にのゝかなはへだつたれど、いもをこひてわが待といふ心につづけさせたまふなるべし。(『代匠記』初稿本、貞享末年1687頃)

(4) 志摩国英虞郡・あこのまつばら

『万葉童蒙抄』で「あこの松原」と訓んでゐるのを参考にしたのであらう。真淵は志摩説をとつてゐる。河口滞在は十一月二日から十二日に亘り、五日から十一日の七日間が空白であり、志摩詠(6・一〇三三家持)もあるところから、持統天皇の志摩行幸(参考歌、1・四〇〇四二人麻呂他)を偲び、志摩国英虞(国府所在地に近い)へ行つたとするもの(『冠辞考』)であるが、『続日本紀』にも不載のことでは疑はしい。

○吾乃松原。今本吾を和我と訓しは誤れり。こは借字也。吾王と訓に同じ意にて阿碁とよむべし。冠辞よりは妹に恋明す意につづけさせ給へども、次の句よりは志摩国英虞郡の松原のけしきをよませ給ふ也けり。(『万葉考』明和四年1767)なほ、『冠辞考』(「いもにこひ」の項)参照のこと。

(5) 安濃(安濃郡、安濃津)・あこのまつばら

今の津市である。津の生んだ学者谷川士清の説である。「吾」を「あ」と訓むのは無理がある。

○あこの松原は夫木集に見ゆ。万葉集に河口ノ行宮より眺望の御製を載せて吾の松原と見えたるを、古来あがとよみたるはいかが。あのとよむべし。此松原はもと津の町と海との間にいとふりて見えけるを、明応中の地震に破却せりといへり。夫木集に いせのうみあこの松原待つともいひし日数になみはこえつつ(『倭訓栞』安永六年1777)

(6) 吾自松原(非地名、枕詞説)・わがまつばらゆ・あがまつばらよ

地名ではなく枕詞であるとするのは可能であるが、誤字によつてゐる点に難がある。『略解』の引くところに拠ると本居宣長は「わがまつばらゆ」と訓み、鹿持雅澄はこれを三八九〇番歌により「あがまつばらよ」としてゐる。後、折口信夫の『口訳万葉集』も宣長説に従つてゐる。

○宣長の言へらく、吾をアゴと言ふは、吾王と続く時に限る事なり。是れはオへ続く故におのづからゴと言はるるなり。唯だに吾をアゴと言ふ事無し。こは吾自松原と有りしが、自を乃に誤れるにて、初句はまつ(待)へ懸かる枕詞なり。何処にまれ、唯だ松原よりと言ふなり。地名に有らずと言へり。(『略解』寛政十二年1800)

○吾乃松原は、本居氏、此は吾自松原とありしが、自を乃に誤れるにて、初句は、待と云へかかれる枕詞なり。いづくにまれ、ただ松原よりといふなり。地ノ名にあらずと云り。(『古義』天保十三年1842)

(7) 松原村(朝明郡松原村、聖武天皇社・朝明郡富洲原村松原)

桑名藩士で国学者の黒沢翁満(寛政七年生、安政六年没)が撰し

た『北勢古志』(下)が出した説で、「吾乃松原」は万葉時代特に何処といふ地でもなかったが、新古今以来名所歌枕となつたとするものである。宣長を敬慕した人物であるから、右に挙げた宣長説に拠つてゐるのであらう。即ち枕詞非地名説と思はれる。ただ、翁満は一〇三〇番聖武歌の成立場所を考究し、松原村即ち今の四日市市松原町、四日市市富洲原町天王(松原町と富洲原町は隣接してゐる)の地に残る伝誦を発掘したのである。近鉄「富田」駅近く(徳歩十五分)の松原公園内に聖武天皇社がある。この社は翁満の文中に出てくるから江戸末には既に存してゐたのであるが、現神主分部則忠氏に聞いても創立期不明とのことである。この翁満の説は論の運びが慎重なのであるが、後(7)の説に見るやうに歌碑二柱も立てられ、現今の趨勢、「吾乃松原」がこの地であるやうな印象を与へてゐる。なほ『晤語』(諸説(2))では、この(7)説を「後人御製にて名づけしにやあらん。行宮にてみほしましてよませしとの證なし。」としてゐる。

△朝明郡豊田郷に聖武天皇の行宮の舊趾とて、今松原行宮といへり。されどこは後人御製にて名づけしにやあらん。行宮にてみほしましてみよませしとの證なし。(『晤語』日本隨筆大成による。文政三年1820)

○若松原 中昔よりの歌に詠たれども此地名は総ていづこにもいづこにも有ることなし。其本は萬葉集に……とある御歌を新古今集に聖武天皇妹に恋若の松原云々と誤て載られたるより暗にいひそめたる名所にて実にはいづこなどさる地名は無也。されど今と成ては一名の所なれば其始天皇の詠給へりし所を則それと定むべき理なり。扱其天皇の詠給へりし所につきては種々の説々有て詳ならず。まづ万葉集右の御歌の裏書に(裏書とは古注なるを今の本のいできし時本文に出せるものなり) 右一首今案吾松原有三重郡相

去河口行宮遠矣若疑御在朝明行宮之時、所製御歌伝者誤之歟と有。是にすがりて名所拾遺の類に神戸より一里異方に若松村と云有。海辺にして松原の内に里ありなど云は誰も今の若松村を然心得るは非也。又吾師の冠辞考には……又和訓葉には……又千蔭の萬葉集略解には……と云り。今右の説々を合せ考るにいづれも一ト渡は聞へたる中に、略解に云る本居氏の説ぞ縦横に行通りて誠に然るべくは聞へたる。されど又英虞の説もいとおだやかに聞へ、されば猶其方に心ひく人も有んか。……又かの萬葉の裏書もさすがに古事なればひたぶるとも捨難かるべし。故いま彼是につきてつらつら考るに、今の世、朝明郡の内に慥に其跡を残せる所あり。是本より好事者の設たるにも非ず。又いささかもさかしらをまじへたるにもあらず。ただいかなる故とも知らで云伝へたる事にて誠に尊証なるべし。そは此郡に松原村有て、その産土に聖武天皇を祭れり。其社地則古の行宮の跡なる由云伝たり。扱又其村に當時行幸有し時より今の世までも、いやつぎつぎに他^(あたし)血筋をまじへずして伝りたる家唯一家あり。是則當時行宮の何くれのわざを仕奉し家にて氏を松原と云り。おのれまのあたりとひ行て古伝などもやあると尋しに、いやしき者の事なればこまに云伝たる事もなし。……はじめは松原氏なりしを今は田村となん改めたる云り。……又其村の並に蒔田村にも、そのかみの行幸にちなみ有よし云伝たる前川氏の家々あるなり。扱かく松原村に行宮の跡有て又松原氏の古家あり、又此あたりに松寺・高松など松の名をよぶ村々あるもそのかみ松原なりしなごりなれば、極めて此処なるべし。かくて其東の浜に鶴の鳴渡るを見そなはして詠まれし御歌としては聞へたれ。そのかみ早く松原でふ名有しにはあらず。唯に松原成し所也。扱其後に松原村の名を得しものぞ。かく見る時

はかの裏書に有三重郡云々と有にもいと能叶へる也。……其上裏書に云るおもむき朝明行宮にての御歌とせんに若松のあたりに鳴渡る鶴の見へん事有べくもあらず。とにかくに此所にてこそよく叶へれ。『北勢古志』下巻、嘉永三年写のものが『国書総目録』に拠ると東博にあるが、今見る機会がなく、昭和二十五年の騰写版により、奥野氏『萬葉三国志考』所引本文によつて一部訂した。嘉永三年1850以前)

○富洲原村大字松原の地は天平十二年十一月甲申の朔丙午聖武天皇行幸あらせられたる地なりと伝ふ。彼の萬葉集に、妹丸恋吾乃松原見渡者潮干乃瀉尔多頭鳴渡とあるは朝明行宮にての御製なりと。『三重県三重郡誌』二五五頁大正六年1917)

(7) 松原村 (7) 説と同所・あがのまつばら

現地 (聖武天皇社境内) に歌碑二柱及び史跡指定柱が建てられ、事情を知らない人にはここが定説という印象を与える恐れがある。

○歌碑 (万葉原文) (明治廿三年二月1890朝明郡松原村)

○歌碑 (万葉訓み下し文) 碑裏面文・昭和三十年は聖武天皇崩御後一千二百年に當れるをもてわが松原区の産土神聖武天皇社の境内に御製の記念碑を建て聖蹟を永遠に顕はさむとす 執筆は伊勢出身の佐佐木信綱博士なり 昭和三十年五月 松原区聖武天皇社氏子中 (昭和三十年1955)

○旧朝明郡松原村 (四日市市松原) に行幸趾を伝へ、聖武天皇社があり、明治十三年に建てた萬葉歌碑もあるが、この付近に求めることは左注との不一致はあるものの、朝明行宮が統紀に明記されてゐる限り、考へてよいのではないか。(松田好夫氏「東海地方に於ける万葉集」『万葉集大成』風土篇、昭和三十年十二月1955)

○標柱 (昭和歌碑横) 「名勝 萬葉史蹟 吾乃松原 四日市市 昭和三十一年十一月八日指定」 (昭和三十一年1956)

○「吾の松原」の故地については、異説もあるが、四日市市松原町 (旧朝明郡松原村)、国鉄関西本線「富田」駅の北、国道一号線を北上して四日市北警察署北側の道を西に入つたところに聖武天皇社があり、そのあたりが松原公園となっている。この付近とすべきであろう。ただし、作歌事情については、「河口行宮」において、以後の巡幸先を思いやつてのものと解することもできる。(稲垣富夫氏担当『東海の万葉』松田好夫氏編昭和五十一年1976)

○聖武天皇は今の四日市市松原町付近と推定される地、「吾の松原」で、： (歌略) : (6・1030) と詠み、(稲垣富夫氏『万葉のふるさと―カメラ紀行―』昭和五十三年1978)

(8) 安濃 (安濃郡、安濃津)・あがのまつばら

鴻巣盛広の『全釈』は「アガノマツバラ」としながらも一案として「アノ松原」を考へ、金子『評釈』は「アノマツバラユ」と訓んでゐる。いづれも「吾乃」と訓んでをり、この点は私案の一つと同じである。

○左註に吾松原在三重郡とあるから、地名であることは疑ない。或は左註の三重郡は誤で、吾乃松原は安濃松原ではないかとも思はれる。然らば今の安濃津付近で、河口行宮から一志郡家に赴かれ、更に鈴鹿郡赤坂へ向つて北上の際、通過あらせられたものか、考ふべきである。(『全釈』、昭和八年1933)

○あがのまつばらゆ 吾は伊勢国安濃郡の地名。その津を安濃津といふ。諸註誤る。ユは読み添へた。今回行幸の御道筋は、赤坂ノ頓宮から吾の津 (安濃津) に出られたと考へられる。(金子元臣『評釈』昭和十五年1940)

(9) 一志郡香良洲町・あがのまつばら

河口行宮から遠くはない地としての推定であり、根拠があるとも

思はれない。

○この吾乃松原は古の熊野浦にして、後の一志浦即ち雲出櫛田二川間の沿岸であつたものと思ふのである。今の現に辛洲浦の如き御製歌を拝察するに足るべき白砂青松の浜が存在してゐる。(守岡弘道氏「萬葉集に見ゆる吾乃松原に就いて」『国漢』十一、昭和八年1933)

(10) 富洲原町方面・あれのまつばら

これも(8)説同様、その訓みだけは私案の一つと同じであるが、奥野健治氏はこれを「其海岸が大粒の礫浜よりなりたるが故の称」とし、地名とみる点が異つてゐる。なほ氏の『萬葉三国志考』は資料を博搜してゐて本稿を為す上で大いに教へられた。

○卷一の安礼乃埼と同一地名と見、初句を「妹に恋ふ」と訓み第二句を如斯「あれの松原」と訓みて考察せむとす。(中略)要之、吾乃松原は、私案にては「安礼乃埼」と同一地にして共に語根とする崎・松原を指す事となれど、其旧地としては左注にて只三重郡の海岸に当る事が判明する以外には、今にしては不明とすべく、強て其地を想定せむとせば、北勢古志説の旧朝明郡富洲原町方面が便ならむかと思はる。依て本書にても一応其地方ならむかとするものなれど、厳密に云はば、当時には此地の海岸線が著しく西方に引込みたりしものと思はるが故に、特に今の富洲原町松原なる一区域を以て其と固執するにはあらず、只仮に此付近を一候補として記し置かむとするのみ。「あれのまつばら」の項

此地を次項の三重郡吾乃松原の「吾」を「あれ」と私訓すると共に、吾と安礼は同一地なりと看做し、其海岸が大粒の礫浜よりなりたるが故の称とするものにして……「あれのさき」の項(奥野健治氏『萬葉三国志考』昭和二十二年1947)

(11) 楠町^{すくも}辺り(三重郡)・あがのまつばら・わがのまつばら

左注の「吾松原在三重郡」を尊重したもので、聖武天皇社(7)説は三重郡から離れてゐるとみたものであらう。

○あがの松原 現在の所在は不明であるが、三重郡の地名とすべきであらう。三重郡は今の三重郡の南部で、四日市市の南、楠町に至る海岸のどこかに求めるべきであらう。アガノマツバラと訓めば、あがの松原を、の意に解すべきである。(澤瀉久孝『注釈』昭和三十五年1960)

○吾の松原(わがのまつばら) 左注に「三重郡にあり」とあつて、四日市市の南から三重郡楠町にいたるところかの海岸であらうが所在未詳。(大養孝氏『万葉の旅』中巻、昭和三十九年1964)

以上が、管見に入つた諸説の全てである。

なほ参考事項として、歌枕「安濃の松原」(津市)もあることを付言しておく(『勢陽雜記』・契沖『類字名所外集』・『三国地誌』・『勢陽五鈴遺響』・『伊勢名勝志』等の安濃郡の各条参照)。

VI 「わかの松原」の歌枕化

一三〇番歌第二句の、天曆五年(九五一)年 梨壺の後撰撰者五人による古点(元・古・紀・西・細・温・矢・京の万葉古写本)は「わかのまつばら」である。類聚古集は「わかまつばら」とする次点であるが、一般にはこの古点で以後知られてゐたとみてよい。

この「わかの松原」は伊勢の歌枕(注十八)として後、定着してゆく。この過程を、以下管見に入つた関係歌①②③④⑤⑥⑦⑧を挙げて考察する。

①妹に恋ひわかの松原見たせば潮干の渦にたづ鳴きわたる(新古今、10、八九七、聖武天皇)

②雪つもる和歌の松原ふりにけりいく世へぬらむ玉津島守（金槐、続

国歌大観二九七三〇、続後撰一三四七、夫木、源実朝）（注十九）

③玉津島わかまつばら夢にだにまだ見ぬ月に千鳥なくなり（金槐、続国歌大観二九五七九、夫木、源実朝）

④いせしまやしほひのかたのあさなぎに霞にまがふわかまつばら

（後鳥羽院御集六六七、風雅二二、後鳥羽院）

⑤伊勢島や和歌の松原見わたせば夕しほかけて秋風ぞ吹く（続古今一五七一、光明峯寺入道前撰政左大臣）表記文字面は国歌大観による。

⑥夕なぎの春の潮干はしづかにて霞に遠き若の松原（夫木、中務卿のみこ）

⑦雪ふればわか松原埋もれて塩干のたづの声ぞさむけき（新続古今七一一、藤原雅永）

⑧むれくるやつるの心もはるの色に雪きえけりなわかまつばら（雪玉集、6・二二九一、三条西実隆）（注二十）

『能因歌枕（広本）』（日本歌学大系一）の「国々の所々名」や、清輔の『和歌初学抄』（日本歌学大系二）の「所名」を見てもまだ「わか松原」は見出せない。「わか松原」の歌枕としての成立は①歌の新古今より後とみてよいであらう。新古今が時代の一つの規範となり、且つ④歌の後鳥羽院詠が第二の大きな契機となつて、歌枕として定着したのであらう。新古今の①歌は万葉古点歌である。埋れてゐた万葉歌が新古今に再録されたことで当代の注目を浴びることになった。ただ、歌枕としての成立は④歌以降となることは、②③歌の実朝詠に「玉津島」が詠み込まれてゐることによつてわかる。実朝は「和歌の浦」と混同してゐるらしい。細川幽斎（天文三〇・慶長十五）の「和歌の浦は紀伊国、若松原は伊勢なり」（注二二）と云ふ言及も必要となつてくるのである。江戸初（元和三年）の『類字名所和歌集』では①⑤④⑦

歌を挙げて「若松原 三重郡 紀州有同名」、②歌を掲げて「若松原 伊名草海部両部可釈之 伊勢同名有之」とし、契沖元禄五年の『勝地吐懷編』（二巻本）や江戸末の歌枕書『秋の寝覚』（注二二）でもこれに従つてゐる。④歌が歌枕化の契機となつたとするもう一つの理由は、④歌が⑤⑥歌の本歌になつてゐることである。「わか松原」以外に⑤歌では「伊勢島」・「夕しほ」、⑥歌では「夕なぎ」・「霞」と④歌の語まはそれに対応する語が詠み込まれてゐる。順徳院の『八雲御抄』（五、名所歌）には「わか松原伊勢万鶴なきわたるしほひのかた」とあるが、これも④歌後のものとみていいであらう。こうして歌枕「わか松原」（注二三）は定着し、「和歌の松原」の用字まで使はれるやうになつたと云へよう。

以上の過程を整理すると、次のやうになる。

(イ) 吾乃松原（万葉）

(ロ) わかのまつばら（万葉古点）

(ハ) 新古今所収万葉古点歌（①）

(ニ) 後鳥羽院歌（④）

(ホ) 歌枕定着

歌枕認定の大きな要素として「詠み合はせ」（注二十四）の有無がある。「わか松原」の詠み合はせとしては「潮干（潮）」「鶴」が指摘でき、時として「伊勢島」も挙げ得る。「潮干」「鶴」は①歌の歌語であり、即ち万葉歌の情意を承けるものと云へる。

（注）

一 万葉第四期のものであるが、巻四、七〇七番歌のやうな例があるにはある。

二 澤瀉久孝『萬葉集序説』昭和十六年。伊藤博氏『萬葉集相聞の世界』昭和三十四年。

三 山田孝雄『奈良朝文法史』大正二年。三九〇頁。
四 同右、四一二頁。

五 この十首以降の歌は年代も天平十年以降で離れてをり、家持歌日誌巻の中で「古」に属することになる。

六 土屋文明氏は『私注』で「今ここに見える十首は採録の機会がなかったのを、後年、家持が聞に従つて書留めたものであらう。」とし、伊藤博氏は『古代和歌史研究』の中で「歌稿は彼（筆者注石守）の手許に蔵せられていたのであらう。十五巻本から洩れる筋合は充分にある。」（二巻三三二頁）「ずばり言つて弟書持の手許にあつたのではないか」（同三三三頁）とし、石守から書持へ、そして家持へといふルートを想定してゐる。

七 山本健吉氏『大伴家持』昭和四十六年。二〇頁。

八 契沖『代匠記』初稿本で既に序詞との解を示してゐる。井上通泰の『新考』でも「イモニコヒワガの七言は二句に跨りてマツにかかれる枕詞なり」とする。賀茂真淵は『考』及び『冠辞考』で「イモニコヒ」は「あごの松ばら」（地名）にかかる冠辞とし、『略解』もこれに従つて枕詞とする。金子『評釈』は「安濃松原」（地名）にかかる序詞、『略解』所引の宣長説及び『古義』は「イモニコヒ」が飛んで下のマツにかかる枕詞であるとしてゐる。

九 『奈良朝文法史』（注三）、三九三頁。

十 この両訓は植村文夫氏が鴻巣全釈一案「アノマツバラ」か奥野氏の「アレノマツバラ」がよいとしてゐるのと一致するが、それは訓の上だけで考へは全く違ふものである。植村文夫氏「萬葉集に現われた伊勢の国」三重大学文学部研究紀要第十三集、昭和三十年。植村文夫氏「万葉三重」二二頁、植村文夫氏若松正一氏編『三重の文学』所収、昭和五十二年。

十一 伊勢・美濃・近江と行幸後、その年の十二月十五日条に「皇帝在_レ前、幸_二恭仁宮_一、始作_二京都_一矣、太上天皇皇后在_レ後而至。」（続日本紀）とあることにより確認できる。契沖は『代匠記』

（精撰本）で「御心ニモ皇后ヲ恋思シメスベシ」としてゐるが、これは続日本紀の解釈の違ひからくるものであらう。

十二 契沖は『代匠記』で「今（筆者注：筑前の）若松ときこゆる所なるべし」（初稿本、巻十、二一九八番歌項）「今筑前二若松ト聞ユル処」（精撰本、巻十七、三八九〇番歌項）としてゐる。

十三 『代匠記』初稿本でも「わがごとく妻にこひてや啼わたらん」としてゐる。

十四 松田好夫氏著「万葉集年表」（陽暦換算、加藤静雄氏担当）昭和三十一年による。内田正男氏『日本暦日原典』（昭和五十年）によると十二月七日になる。

十五 『総釈』巻十七（佐佐木信綱担当）昭和十一年。

十六 鴻巣『全釈』、『総釈』（安藤正次担当）、武田『全註釈』、大系本、澤瀉『注釈』など。『代匠記』初稿本ではB歌とは無関係に、C歌は三重郡であるとする。

十七 鹿持雅澄『古義』も同じく見てゐる。

十八 歌枕についての研究で、早く且つ基礎的なものとして中島光風の『歌枕』原義考證（『上世歌学の研究』所収、昭和二十年）がある。

その後、歌学史の論考も多くあるが、歌枕の成立といふ点からみて注目すべきものに角川源義「歌枕をめぐる人々」（『日本文学の歴史』第三巻、昭和四十二年）、片桐洋一氏「歌枕の成立」（『国語と国文学』昭和四十五年四月号）、古橋信孝氏「歌枕の構造」（『国語と国文学』昭和四十九年五月号）、奥村恒哉氏「歌枕」（平凡社選書、昭和五十二年）、佐佐木忠慧氏「歌枕の世界」（桜楓社、昭和五十四年）などがある。

十九 本文は斎藤茂吉校訂『新訂金槐和歌集』（岩波文庫）に拠つた。

二十 『私家集大成』（中世V）『雪玉集』（北海道教育大学附属図書館蔵本）昭和五十一年。

二十一 東常縁『新古今和歌集聞書』（尾上八郎校訂『新古今和歌集新鈔』富山房名著文庫第一期、昭和二年）。但しこれは細川幽斎補訂本で、その原形聞書は、山崎敏夫によつて翻刻されてゐる（『説林』III IV号、昭和

和三十四年。それによると新古今、卷十、八九七番歌は原形聞書(前抄)に
なく、後の幽斎による補訂であることがわかる。

二十二 『歌枕 秋の寝覚』 文政九年再版。弘化四年の三版による。

二十三 この歌枕「わか松原」の場所比定は、三重郡内とも考へられ
るが、V章諸説(2)の伊勢若松が妥当であらう。橋川博美氏は「鈴鹿川
を渡り、国府のあたりから東に向かう道をたどると、今もなお遠く海
辺の方に松林を見ることが出来る。そこは鈴鹿市若松から千代崎、そ
して鼓が浦と続く海岸一帯で、「わか松原」を想定したくなる方角で
ある。」(『伊勢の歌枕』『三重の文学』所収)としてゐる。

二十四 「詠み合はせ」とは井手の山吹といふ具合に、歌枕と特定の物
との結合を云ひ、その結合からくる情調を尚ぶものである。「詠み合は
せ」を説いた書に淵田不威著『名所和歌探本源抄』がある。初版元
禄二年序(京大図書館蔵)、再版元禄八年(神宮文庫蔵『名所和歌探源
抄』)。

(一九七九年九月十六日稿了)

〔附図〕 余白を借りて、Vの諸説通観で挙げたものの内、(3)(6)の非
地名説を除き、その所在を次に示す。

